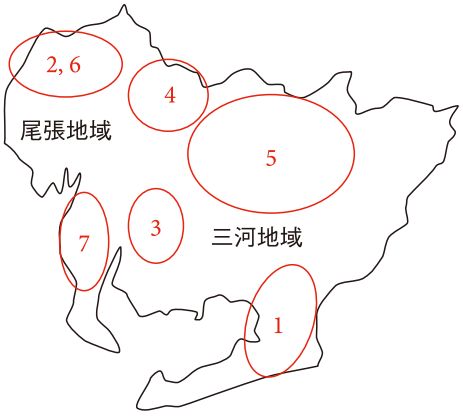
STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

眞田岳彦

あいちNAUプロジェクト

あいち6地域・7施設を巡り、自身の足もとにある、
「生き抜くちから」を皆でみつけ、その「ちから」を綯いアートで伝える。



1. 豊橋市で綯う
〈豊橋市民俗資料収蔵室
（豊橋市美術博物館付属施設）〉
テーマ：豊橋の玉糸がつなぐ人
4月16日

2. 一宮市で綯う
〈一宮市三岸節子記念美術館〉
テーマ：機業と女性のちから
4月23日

3. 安城市で綯う
〈安城市歴史博物館〉
テーマ：安城の農業と繊維
4月30日

4. 瀬戸市で綯う
〈愛知県陶磁美術館〉
テーマ：愛知の土と人
5月1日

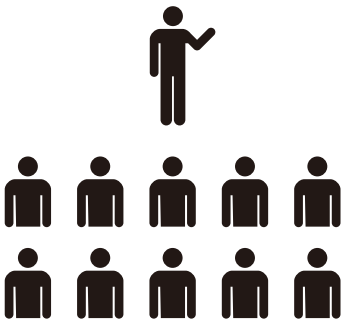
5. 豊田市で綯う
〈豊田市近代の産業とくらし発見館〉
テーマ：豊田の養蚕とくらし
5月14日

6. 一宮市で綯う
〈一宮市博物館〉
テーマ：一宮の繊維の変遷
5月15日

7. 知多市で綯う
〈知多市歴史民俗博物館〉
テーマ：知多の木綿と晒
5月21日

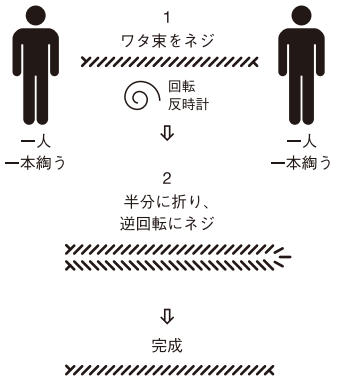
〈開催内容〉

1. レクチャー＆トーク



自身の足もとにある、
「生き抜くちから」を皆でみつけ、

2. みんなでNAUワークショップ



その「ちから」を皆で綯い、

「今、を生き抜くアートのちから」をみつけ、大きくNAU

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

みんなでNAU　スタッフ＆参加者

豊橋市民俗資料収蔵室（豊橋市美術博物館付属施設）

登壇：天野武弘
実演：成岡久男、成岡靖子
実演協力：三木令子、奥中竹代、Takano Kyoko、朝倉美知子
運営協力：増山真一郎、田中竜也、大竹良夫
参加者：森下かおり、大友真希、片倉和人、楠野充絵、菰田真理子、成田、岩崎正弥、川口航司、千春Chiharu、秋田洋子、MIKI、守田愛歌、オカモトヨシエ、まさちゃん、中村修康、河口正男、加藤明彦、清水伸子、MICHIKO、成河端子、成河貴之、神田年浩、Yasuyo Kamimura、白井一、小林浩充、木村洋介、加藤政実、一田昌利、渡邉、五十川ゆう、小清水久嗣、樋口義治、近藤幸子

一宮市三岸節子記念美術館

登壇：野田路子、成河端子
参加者：ボギー鈴木、新居愛、大友真希、林美和、鵜飼正信、加藤良平、Sakuma Nanami、森遥香、真田樹甫、MYU、細江まり子、野々垣久枝、伊藤すみれ、伊藤みさ子、熊澤總子、内藤きみ子、猪口佳子、小島静子、後藤涼、千春Chiharu、扇千花、泉裕子、加藤えり子、KAKIMI CHIEKO、梁淑堯、長谷川優、五十川ゆう、鈴木良子、浅岡達夫、久保寺恭稔

安城市歴史博物館

登壇：野上真由美、伊藤基之
参加者：深谷孝之、下村光生、佐藤晴美、佐藤、杉山春花、ゆみ、岩田智代、坂部俊生、K.Hanai、田口美香、nin、小田鮎子、有田泰子、鈴木昌泰、あきの、Yasuyo k、松本留美、The Apron Collective、五十川ゆう

愛知県陶磁美術館

登壇：佐藤一信
参加者：髙木美樹子、末次未莉子、ボギー鈴木、近藤祐司、松永こむぎ、貝塚惇観、八木啓司、八木知沙子、八木陽向、八木香暖、八木あおと、河原奈賀子、加藤紀子、佐藤綾、坂部俊生、comicchan、梁淑堯、nin、沖野尚子、Maririn1116、石井芳、じゅん、hanechan、y-kamimura、鬼頭利明、鬼頭和佳子、ほりやままゆみ、小野内茂喜

豊田市近代の産業とくらし発見館

登壇：小西恭子
実演：舩木麗子
運営協力：鈴木なつみ
参加者：髙木美樹子、Miyuki.h、青柳諒、三村美穂、三村真実、Sakuma Nanami、片倉和人、秋田 洋子、akkie、オカモトヨシエ、財津里沙、財津裕真、財津日登美、佐藤綾、天野一夫、ミホ、西口麻実子、江口、田中、五十川ゆう、森田桃子

一宮市博物館

登壇：神田年浩
実演：尾張もめん伝承会（熊澤聡子、鈴木良子）
特別参加：片岡真実
参加者：T・INOUE、梶浦みなみ、梶浦佐知子、日野絹枝、G.Sayuri、玲汰、chagall、加藤、加藤良平、Nanami Sakuma、片倉和人、Chiharu 千春、扇千花、Hori、泉裕子、S.Kato、後藤真里、永井邦栄、KAKIMI CHIEKO、財津里沙、神田、Y kamimura、梁淑堯、長谷川優、Chie、柚歩、拓実、山路芽衣、Yuna S. Rhodes、竹内文康、大野直子、飯田志保子、大口昌俊、辻本哲朗

知多市歴史民俗博物館

登壇：新美朋子
実演：吉川佳代（知多木綿連絡会代表）
参加者：稲熊敏長、Miyuk.h、新居愛、Hikita Miu、I.Tani、髙村、tofu、松﨑アトリ、須田まゆ美、須田穂乃花、須田萌々伽、神村泰代、江口梨津子、江口愛梨、江口結菜、さーりん、カエくん、R.Matsumoto、河合紀子、河合理莉、深谷留理、深谷司、深谷慎司、徐依寧、李嘉禾、王好雨、増山真一郎、関智子

（博物館名は開催日順、その他順不同）
＊その他、各地域美術館・博物館スタッフ・関係者等にご協力いただきました
＊作品の綱には、各地参加者の氏名が地域ごとの色のタグに書き込まれています

眞田岳彦　あいちNAUプロジェクト

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
後援：英国羊毛公社日本支部

協力：
〈連携協力〉豊橋市美術博物館、一宮市三岸節子記念美術館、安城市歴史博物館、愛知県陶磁美術館、豊田市近代の産業とくらし発見館、一宮市博物館、知多市歴史民俗博物館（開催日順）
〈寄稿協力〉愛知大学中部地方産業研究所研究員 天野武弘、あいち産業科学技術総合センター　尾張繊維技術センター・三河繊維技術センター、蒲郡市博物館（順不同）
〈調査／取材協力〉ニッケ（日本毛織株式会社）、繊研新聞社、女子美術大学歴史資料室（順不同）

グラフィックデザイン：加納大輔
映像制作：Twelve Inc.（山城大督、須賀亮平）
撮影アシスタント：大野高輝
設営：ミラクルファクトリー

あいちNAUプロジェクト運営スタッフ：
安藤行宥、稲垣知里、遠藤真央、木全裕子、塩津青夏、鈴木一絵、祖父江彩香、髙見翔子、瀧澤侑加、都築芳郎、二條朋子、東出太郎、平井あゆみ、村松達樹（五十音順）

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

あいちNAUプロジェクト「今、を生き抜くアートのちから」

眞田岳彦

愛知の地形と綯う

愛知の地形は独特です。それは東海湖(約650万年〜約80万年前)や縄文海進(約6500年前)など、水と土砂の堆積が織りなした物語でもあります。

愛知県は、北は長野県、岐阜県から山並みが続き、北東部の美濃加茂市等に見られる河岸段丘群、北部の各務原市から北東部下流域の犬山に広がる扇状地、濃尾平野中央部には氾濫原、南は太平洋に面して伊勢湾、三河湾があり、木曽川、庄内川、矢作川、豊川が流れ込んでいます。そして、周辺には農業に適した肥沃な沖積平野、伊勢湾沿岸では三角州(干拓デルタを含む)地域が広がっています。

約3〜4万年前に日本に渡来した人類は、その後、各地に広がり、現在の愛知県周辺に居住した人々は、悠久の時間の中で培われた土から陶器を作り、植物から繊維を綯い、この地域を支えてきた産業の礎を築きました。

愛知県地域の大地の成り立ちや原初的な人の営みを知った私は、愛知の生活文化の根底を成すものは、大地を成す土壌であり、それらを利用して発達させてきた技である「陶・綯・トウ」という語句に象徴されると捉えました。

あいち「綯う＝NAU」プロジェクト

愛知県は広い。広い平野が続く県内を私は「あいちNAUプロジェクト」の事前調査のために、一宮市、江南市、犬山市、小牧市、あま市、瀬戸市、名古屋市、東海市、知多市、常滑市、刈谷市、有松地区、半田市、知立市、安城市、豊田市、岡崎市、碧南市、西尾市、蒲郡市、豊川市、豊橋市、田原市と巡りました。

各地では桑の栽培、養蚕、製糸、絹機織り、棉栽培、綿繰、紡績、晒し、和紡積、綿機織り、ウール紡績、ウール機織り、織機製造、繊維流通、農業指導、人材教育、地域社会・産業創造などに関わった先達のことを知り、さまざまな繊維文化と、それを継ぐ人々に出会いました。

特に印象深かった一宮市、瀬戸市、安城市、知多市、豊田市、豊橋市の7つの美術館・博物館に協力を依頼し、各地の繊維に関わる歴史、生活、人の営みを参加者と共に知り、今を豊かに生きるために「今、を生き抜くアートのちから」を見出したいと考えました。

本プロジェクトでは、2022年4月〜5月に、地域の美術・博物館等の学芸員や専門家による繊維に関わるレクチャー、そして、作品を構成するための「縄」を参加者と綯うワークショップを実施し「今、を生き抜くアートのちから」を各地の人々と探求しました。

NAUプロジェクトの感動から眞田岳彦が見つけた「今、を生き抜くアートのちから」

1：豊橋市民俗資料収蔵室
(豊橋市美術博物館付属施設)

「自捨への柔軟心(にゅうなんしん)」

群馬から移住し、玉繭製糸を生み、地域を育んだ。
「小渕志ち」という人の生き方への共感と感動。

2：一宮市三岸節子記念美術館

「一心な純眞さ」

山深い山村出身、家に帰っても食べられない女工達。
機織りを通した都会への夢、
家族への思い、自己の芽生えへの思い。

3：安城市歴史博物館

「利他に生きる」

明治用水造営、教育、産業購買販売組合の設立。
都築弥厚、伊与田与八郎、山崎延吉らの
共に作り生きる思想への感動。

4：愛知県陶磁美術館

「悠久(ゆうきゅう)に在る了知」

1000万年以上前から幾度もの地球規模の変化を
繰り返し堆積・形成された。愛知の大地を知り、
今を生きることへの感謝。

5：豊田市近代の産業とくらし発見館

「伝世(でんせい)」

祈りの為、生きる為、暮らしの為の養蚕。
日々の暮らしのなかで育まれた養蚕。
養蚕に生きた先人を伝える人々への感銘。

6：一宮市博物館

「新機軸(しんきじく)を求めた共研(きょうけん)」

繊維産業の業種を超え共に研究をする
「愛知県四幅毛織物研究会」誕生。
新しい価値を共に創造する人々の姿への感動。

7：知多市歴史民俗博物館

「外求と内変」

水・資源に乏しい土地、
海に囲まれた半島の地の利を生かした。
木綿入手、晒技術、動力織機の
供給・製造製品需要も外に求めた生き方への感銘。

これら、各地で見出した「今、を生き抜くアートのちから」を元に思索をたて、プロジェクトで綯った縄を構成した造形作品「白維」を制作しました。

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

あいちの土地と人と繊維

愛知の土と人

愛知には他に類を見ないほど豊かな陶磁文化があります。

それはやきものを「せともの」と呼ぶことに始まり、知事の記者会見の背景に映り込む陶壁や、街を歩くと目に入ってくる建物を覆うタイルや瓦屋根などの街のディティール、人々の祈りを形にした神社の陶製狛犬、今日、「昭和レトロモダン」と再注目される昭和の食卓を一変させた洋食器も当地域ゆかりのものです。

この独特の文化が育まれたのは何故かといえば、太古の時代からこの地で多くの人が暮らし、原初の道具としてやきものを作り、時代に沿って次第にもっと高度なやきものが求められる中で、この地域が有する自然の恩恵である、やきものに非常に有用な土（陶土）を見出し、様々なやきものを連綿と創り出したからです。

この土の形成を時代順に見ると、最も古いのは瀬戸の土（瀬戸陶土層）で、今から1200万年から1000万年前に堆積したと考えられています。これが今日まで続く瀬戸を中心とした愛知のやきものづくりを支える重要な資源で、国内は元より世界レベルで優れた特性を備えた素材です。

その後、650万年前頃、東海湖堆積盆地（東海湖）が出現し、80万年前頃に消滅します。最大期には愛知県のみならず、岐阜県、三重県にまでまたがるような規模であったと推定されています。ここに堆積した地層を東海層群と呼びますが、そこに含まれる土も常滑をはじめとする愛知のやきものに欠く事の出来ない資源をもたらしました。

70万年から10万年前には武豊層、野間層、多屋層、碧海層といった海成粘土層が出来上がりました。

さらに愛知には、自然的条件では、山川があり、燃料となる広大な森、そしてあらゆる工程で必要となる水が周囲に豊富にありました。

それらを用いて、縄文土器に始まり、弥生土器ではパレススタイルの土器、猿投窯（さなげよう）の灰釉陶器、渥美窯の線刻文の三耳壺（さんじこ）、瀬戸の瓶子、狛犬、馬の目皿、染付磁器、ノベルティ人形、常滑の大甕（おおがめ）、急須、土管、タイル、衛生陶器、高浜の鬼瓦、名古屋の茶陶、洋食器、そして、現代の陶芸作品まで、ここで人は連綿とやきものを作り、日々の営みを続けてきたのです。

未知の感染症、貧困、紛争などの問題に直面するこれからの時代を生きていく上で、1万年以上にわたって続いてきた愛知の土と人の出会いから得られた知識や技術、感性、考察、思想は、生き抜く力の重要な手がかりとなります。成功例としてだけでなく、過去の行動を顧み考察することも必要でしょう。戦後、愛知が三大ハゲ山の一つに数えられたことは、やきもの作りが自然環境に過大な負荷をかけた苦い歴史でもあり、そもそも、やきものに用いる土は幾万年もかかって出来上がった限りある貴重な「資源」です。やきものをとおして、土、自然に接した当地域だからこそ、未来を新たな視野で捉えることが求められます。

佐藤一信（愛知県陶磁美術館）

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

尾張の繊維

尾張地域の繊維産業の概要

尾張地域の繊維産業は、全国一の毛織物産地と言われており、国内外の著名なアパレルブランドへ高品質かつ独創的な衣料用生地を提供しています。加えて、自動車用シート地や高級なカーテン地を手がける企業もあり、繊維産業を通して、多様な産業へ貢献しています。

写真1／尾州産地の工場（織布工場の「のこぎり屋根」）（（公財）一宮地場産業ファッションデザインセンター様ご提供）

写真2／竣工式当日の尾張染織試験場（1930年11月17日）

毛織物には、フォーマルウェアやスーツの無地物、柄物、ユニフォーム地などがあります。近年はウール100％のみならず、綿やポリエステルなどとの複合化も進んでいますが、超細番手のウールやカシミアなどの獣毛繊維を使った高級な生地づくりは世界最高レベルにあります。こうした生地づくりは、この地域の特徴である、紡績、撚糸、染色、製織、整理などの各工程を担う企業1社1社からなる分業体制のもと行われています。（写真1）

この地域は、木曽川の豊かな水と温暖な気候に恵まれ、麻や綿花といった天然繊維の原料となる植物の栽培や養蚕用の桑の栽培にも好適で、江戸時代には綿、絹織物の生産地として全国に知られるようになりましたが、明治時代となり、綿花の関税が廃止され国外から安価な綿が輸入されるようになったことから当地域の綿織物業は衰退していきました。

こうした中、当地域で綿織物に代わりその商品開発に注力されてきたのが毛織物です。製織や染色整理技術、国産織機の開発について、先駆者たちが挑戦し成功したことで、全国有数の毛織物産地への道を進むことになりました。

大正時代の初期、第一次世界大戦が勃発し、毛織物の輸入が途絶える一方で軍服用の需要が増加し、産地がさらに振興するきっかけとなりました。

昭和に入って、生産技術が向上しさらに品質がよくなり、当地域の毛織物はめざましく躍進しました。それに一役買ったのが昭和5年に設立された「愛知県尾張染織試験場」（現尾張繊維技術センター）です。同試験場では、毛織物の製織や染色整理技術の向上を図るため研究、試験、検査などを行って地域に貢献しました。（写真2）

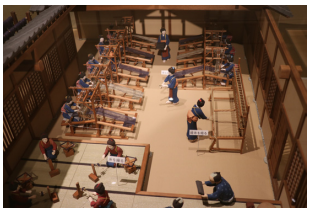
その後、昭和12年の日中戦争、続く太平洋戦争で羊毛の輸入が途絶したことや、戦争により多くの設備を失ったことで産地は縮小しましたが、戦後は国内外から需要が高まり、毛織物産業は「ガチャ万」景気といわれる全盛期を迎えました。その後、好不況を経て、昭和46年の日米繊維協定の締結、昭和60年のプラザ合意後の円高などの逆風があり、その後は、海外製品の増加などにより生産数量は減少していきました。

しかしながら、こうした歴史を踏まえ、現在、長年培われてきた技術と、素材から加工に至る最先端の技術を融合し、さまざまな消費ニーズに対応した生地づくりを進め、今なお全国一そして世界三大毛織物産地の一つとして繊維産業の発展に貢献し続けています。

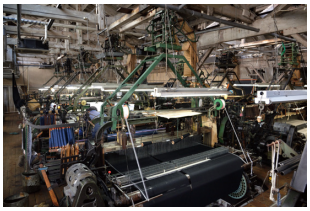
茶谷悦司（尾張繊維技術センター）

一宮の繊維変遷

現在、「尾州」ブランドで毛織物を中心に展開するこの地域は、木曽川による肥沃な平野と気候風土と相まって、時代とともに織物の素材を変えて発展してきました。



「結城縞織屋の図」復元模型（「尾張名所図会」（1842年刊）より）一宮市博物館蔵



葛利毛織工業工場　2022年2月16日　林秀樹氏撮影

縄文時代の編布から、弥生時代には織機を使用するようになり、出土した土器の底にも布目が残っています。古代の史料から絹織物や麻織物の生産がうかがわれ、江戸時代以降に織物の生産地として知られるようになります。江戸時代後期には、桟留縞や唐桟、かん寛大寺縞・佐織縞・和唐桟（わとうざん）・佐々絣（さっさがすり）などの綿織物、絹綿交織物の結城縞の産地となりました。養蚕や木綿の栽培も織物の生産を支えました。明治になると綿織物から絹綿交織物の時代に移り、双子縞（ふたごじま）・結城縞（ゆうきじま）・縞木綿（しまもめん）・白木綿（しろもめん）・羽二重縞（はぶたえじま）など様々な織物が生産されます。縞木綿は柄物という性質上、品質が多様で手工的技術が尊重された結果、他の機業地よりもバッタン機の導入が遅れましたが、明治24年（1891）の濃尾地震後の復旧で、ようやくバッタン機が普及します。それとともに国内向け絹綿交織物が主流となりました。一方で綿糸の輸入が増大するなど綿作は衰退します。さらに、この地方は動力織機による大量生産ではできない多様性を重視したので、織物の新しい柄や糸の工夫に行き詰まり、動力織機の導入にも遅れ、市場間競争でも不利となりました。そこで、毛織物生産に活路を見出し、大正時代になると毛織物を主軸に、動力織機の導入とのこぎり屋根工場の出現で、昭和戦前期には「毛織王国」と呼ばれる一大産地となりました。戦後も毛織物産地として発展しますが、好不況や海外製品との競争や水害等に翻弄されます。

このように、「尾州」は時代ごとに先人の努力を結集した伝統ある織物産地です。旧式の動力織機のガッチャンガッチャンの音はほとんど聞こえなくなりましたが、現在でもあちこちに残る「のこぎり屋根工場」が、この地域の原風景として溶け込んでいます。

神田年浩（一宮市博物館）

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

機業と女性のちから

三岸節子
（1950年代前半）

洋画家・三岸節子（1905–1999）の生誕地、中島郡小信中島村（現一宮市）を含む尾張西部一帯は、江戸時代から織物の生産が盛んで、中でも地元の大地主で織物業を営んでいた節子の実家は、レンガ造りののこぎり屋根工場を所有する大規模な工場でした。ところが、1920（大正9）年、戦後恐慌のあおりを受けて会社は傾き、一家が没落へと向かう中、15歳の節子は「一家の苦しみを何者かになってとりかえそう」と洋画家になることを強く決意。晩年、節子は当時を振り返って、「只今90歳になった私が長い人生通して戦ってきたのは、ただ、ただ、すべてがここにあったからでございます」と語っています。女子美術学校（現女子美術大学）卒業後すぐに結婚した画家・三岸好太郎（1903–1934）の放蕩と早逝、戦争という度重なる苦難に遭っても母として、画家として歩みを止めなかった節子。その原動力には、少女時代に誓った「何者かになる」という、逆境を跳ねのけるまでの強い決意があったのでしょう。

野田路子（一宮市三岸節子記念美術館）

のこぎり屋根工場と女工たち（1960年ごろ）鈴木貴詞氏写真提供

節子が少女時代を過ごした明治から大正頃の一宮近辺では、前借金を受け取った親が12～15歳の娘を機屋に働きに出す年季奉公が、江戸時代から引き続き行われていました。小さな機屋の多いこの地域では、雇い主一家と職工は家族同然の暮らしをしており、お茶や裁縫など花嫁修業をさせるのも雇い主の役目という慣習がありました。一方で、14～16時間の長時間労働に加え、工場によっては雇い主から酷い暴力を受けることがあり、しばしば逃亡する者もいました。昭和20年代のガチャマンと呼ばれる好況を経て、昭和30年代には九州、東北などからの集団就職が行われました。「金の卵」と呼ばれた若者たちは、5時～13時半の早番と、13時半～22時の遅番で交代に働き、空き時間に登校して保育の資格などを取得し、休日には映画や買い物に出かけました。一宮市役所西側に今も佇む織姫像（野水信作・1959年・尾張一宮駅南側より移設）は、華やかなりし往時の姿を偲ばせます。

成河端子（一宮市博物館）

知多木綿の歴史

講座受講生作品（白・縞）

晒し風景・昭和12年頃

知多地方での木綿の生産、移出は江戸時代慶長年間（1596～1615年）に始まったと言われています。農家の女性が副業として織った生白木綿が江戸に送られました。晒技術の無かった時代は、伊勢の白子に送り、晒加工をしてから江戸に送っていましたが、天明年間（1781～89年）には晒技術が導入され、「知多木綿」の名前が定着していきました。流通していた「知多木綿」は白い晒木綿ですが、縞木綿も家族のために「家織り」と言って織られていました。明治時代に入ると、農家の女性による手織りから機械織りへと変化し、工場制手工業の時代になります。明治30年以降は動力織機が導入され、機械化が加速していきます。岡田地区を中心に数多くの織布工場が建てられ、明治末には岡田では生産高の90％程が動力によるものになりました。大正時代から昭和初期には電力の供給により最盛期を迎えることになります。この頃になると、近隣の町はもとより、信州木曽などからも住み込みの女工が来るようになりました。第2次世界大戦後、好景気により岡田の町は女工であふれかえる程だったそうで、九州地方からも集団就職で働きに来ていました。しかし、昭和40年代に入り、国内の重化学工業の発展による労働者不足や海外から安価な木綿が輸入されるなど、織布産業は次第に衰退してき、現在、知多市内の織布工場は1軒のみとなっています。

このように知多木綿の生産が手織りから機械織りになった後でも、農家の片隅では手織りの技術が伝承されていました。その技術を後世に伝えるため、昭和50年代に知多市歴史民俗博物館の前身の知多市民俗資料館で「織りの技術伝承講座」が開講され、現在も毎年30人程の受講生が知多木綿の手織りの技術を学んでいます。現在「知多木綿」として伝承されているのは、糸車を使って綿から糸にする技術と、江戸時代以降、農家の女性が「家織り」として織っていた藍染の糸を基調とした縞柄の織物になります。

新美朋子（知多市歴史民俗博物館）

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

三河の繊維

綿織物・網・網に関する歴史概要、変遷、特徴について

綿織物の歴史と変遷

「日本で唯一綿の神「棉祖神」を祀る神社」天竹神社（西尾市天竹町）

「形原麻網の元祖」小島喜八の碑（蒲郡市形原町）

三河・三州地域●我が国における綿種の伝来は桓武天皇の延暦18年（799年）、愛知県西尾市に漂着した「崑崙人（こんろんじん）」によって綿実一袋を伝えたのがはじまりと言われています。最初に伝来した綿実は途絶えてしまいますが、二回目の伝来である室町時代の後期より綿が栽培されるようになりました。江戸時代の文化・文政年間には、農家の副業として営まれていた綿織物の生産が盛んになり、明治初期には工場の形態に発展していきました。明治末期には織機の動力化も進み、これに伴い蒲郡地域には染色業も伸展しました。昭和2年（1927年）には地場繊維産業を支援する機関として三河染織試験場（現三河繊維技術センター）が設立されました。戦後の好景気、昭和50年代のオイルショックの低迷期を経て、現在の三河産地では寝装、インテリア織物を、三州産地では帯芯や産業資材用織物などを生産しています。

知多地域●慶長年間（1600年頃）に知多から木綿を江戸に陸送した記録が残っており、知多木綿の発祥はこの頃であると言われています。江戸中期には産地に晒技術が導入されて「知多晒」としての名声が高まりました。知多地域が綿織物の産地を形成したのは明治10年以降のことで、チャンカラ織機とガラ紡の生産方式で量産化が始まりました。また、明治30年には半田市で豊田佐吉が発明した自動力織機の導入を契機に近代産業へと発展していきました。現在は有数の白生地織物産地となっています。

網・網の歴史と変遷

蒲郡地域●明治7年、蒲郡市で小島喜八により麻糸製造機が考案され、それまで手で撚っていた麻糸の機械撚り生産が始まりました。明治30年頃、喜八の撚糸機を改良した足踏み式撚糸機が発明され、麻糸生産が形原一帯に広がりました。明治35年頃順次太いロープへと生産が移り、漁業、船舶、鉱山、農耕、軍需用と、用途の幅を広げながらロープ産業は拡大していきました。昭和32年頃には合成繊維が利用されるようになり、現在では合成繊維のロープが主流となっています。

豊橋地域●明治40年（1907年）に広井式足踏かえるまた編み機の発明により、手作業だった網の製造が工業化されて生産性が大幅に向上しました。以来、この地域に製網工業が興ったといわれています。漁網を中心に発展してきた網の用途は陸上用にも広がり、使用される材料も麻や綿といった天然繊維から、昭和30年頃には合成繊維へと変わっていきました。

三河地域、産地のいま

現在も三河地方には知多、三河、三州の綿スフ織物産地、岡崎地域のリサイクル繊維、蒲郡市を中心とする全国一の繊維ロープ産地及び豊橋市を中心とする網産地を有しており、私たちの生活や産業に欠かせない繊維製品が製造されています。その傍ら、近年では繊維と異素材を組み合わせた新しい材料の開発に取り組むなど、さらなる進化を続けています。

平石直子（三河繊維技術センター）

引用文献及び参考資料

1）三河繊維産地の歴史、三河繊維振興会編集（1975）

2）あいちの地場産業、岡崎信用金庫

豊橋の玉糸とその織物

玉糸を使った着物の展示風景（2021年、豊橋市美術博物館）

かつて豊橋は玉糸の商品化を一つのきっかけとして、「蚕都（さんと）」と称されるほど製糸業が発展しました。玉糸とは玉繭（たまゆ）から引いた糸のことです。通常は一匹の蚕が作った繭から糸が取られるのに対し、二匹で作る大きな繭は玉繭と呼ばれます。養蚕家が手掛ける繭のうち、二割程は玉繭が生じ、品質の劣るくず繭として真綿の材料などにされてきました。

小渕志ち（おぶちし）（1847〜1929）は安価な玉繭に注目して、そこから糸を引き出す方法を考案し、自ら興した製糸工場で玉糸の販路を広げました。また、大林宇吉（おおばやしうきち）（1860〜1933）は蒸気機関を利用した玉糸の器械製糸に成功し、工場を近代化して増産に努めます。明治中期から玉糸を手掛ける者が増えて生産量は拡大し、豊橋の玉糸製糸は昭和初期に全国の四割から五割を占めるまでになりました。

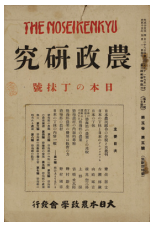
玉糸は二本の糸が絡まって引き出されるので、節ができます。そのため高級な絹織物には適しませんでした。一方、その節が独特の風合いを生み、日常の衣料に好まれました。国内の機業地では、主に銘仙（めいせん）や紬（つむぎ）といった着物に使われています。銘仙は玉繭などのくず繭から取った糸で作られた平織りの織物で、大正から昭和初期にかけて流行しました。紬とはくず繭で真綿を作り、そこから紡ぎ出された紬糸を使った平織りの着物のことで、丈夫な紬は日本各地で織られています。このほか、玉糸は帯や着物の裏地、靴下などに使われました。インド、エジプト、フランスなど海外にも輸出され、戦後はアメリカで玉糸を用いたシャンタンという生地が人気を集め、洋服やかばんなどに利用されています。

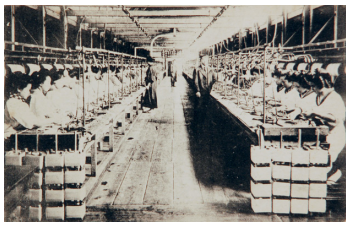
豊橋では戦時中の空襲で多くの製糸工場が焼け、操業が困難になりました。戦後は洋装が一般化し、化学繊維に押されて絹糸の需要が減り、原料の入手も難しくなったことから、豊橋の製糸業は途絶えてしまいます。とはいえ、かつて豊橋の主要産物であった玉糸は全国各地に出荷され、庶民の織物となって人々の生活を支えたのです。

田中竜也（豊橋市美術博物館）

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

日本デンマーク農業と繊維





左／『農政研究　日本の丁抹號』大正15年5月1日発行（安城市歴史博物館蔵）　右／安城山丸製糸所第一工場絵葉書（安城市歴史博物館蔵）

大正末期から昭和初期において安城を中心とした碧海郡一帯は「日本デンマーク」と呼ばれていました。これは、明治13年の明治用水開通後、農地改良を経て豊かな農業地帯となった歴史、産業組合などによる共同化、米麦作に蔬菜（そさい）・果樹・養鶏・養蚕などを積極的に取り入れた農業経営の複合化（多角形農業）、愛知県立農林学校等を中心に農村・農業教育が普及したことに由来するとされています。

この地域の農業と繊維産業との関わりは、日本デンマークと呼ばれる以前からありました。三河地域は江戸時代以来、三河木綿の産地として知られており、この地域でも16世紀後半から畑での綿作が始まり、明治20年代まで盛んに行われていました。明治10年代には、臥雲辰致（がうんときむね）により発明されたガラ紡によってガラ紡糸の生産が急速に拡大しました。しかし、同29年に綿花輸入税が撤廃されると、綿作は大打撃を受け、綿の作付面積は減少しました。綿作に代わり急成長したのは養蚕で、蚕の飼料となる桑の作付面積は増加し、生糸の原料となる繭の生産も増加しました。この地域で作られた生繭は近隣だけでなく三重県や長野県まで広く流通しました。この原料繭の取引をきっかけに、明治44年に長野県上高井郡須坂町（現長野県須坂市）の山丸組の支工場が安城町で操業を開始しました。安城山丸製糸場はアメリカ輸出向けの生糸を製造し、釜数や職工数で碧海郡では群を抜いた存在でした。しかし、昭和恐慌による生糸の輸出量減少による滞貨増大の影響を受け製糸業が凋落すると、昭和４年に山丸組が倒産し、昭和７年頃には安城山丸製糸所も撤退しました。さらに、昭和12年の日中戦争開戦後、地域農業を支えてきた繭や果樹などの農産物から米麦などの食糧生産への転換が推奨され、日本デンマーク農業は終焉を迎えました。製糸業が衰退した後、安城町は紡績会社を誘致し、昭和30年代中頃まで紡績業がこの地域における産業の中心でした。

野上真由美（安城市歴史博物館）

豊田市域の養蚕

絹はカイコの繭から作られます。カイコを育てる養蚕は約5千年前に中国で始まり、弥生時代に日本に伝えられました。奈良時代、三河国（豊田市域がある愛知県東部）は品質の良い絁（あしぎぬ）（太糸を用いて織った絹織物）の産地として知られていました。

明治時代に入り、生糸の輸出が外貨獲得の手段として注目されると、繭・生糸の増産のため、各地で桑の植付けが奨励されました。愛知県下では、明治5年（1872）に養蚕を奨励する布告が出され、明治20年代に入ると、畑作地（代表的な商品作物であった木綿・藍葉の栽培地）から転換する形で、桑畑が拡大していきました。また、同時期、県下では各地域の養蚕農家が、繭の共同販売や蚕種・肥料の共同購入を通して利益増加をはかる養蚕組合をつくり、その数を増やしていきました。

挙母駅祝賀会の写真
大正9（1920）年10月31日 現在の豊田市駅と駅前ロータリー付近が写っています。カイコのエサである桑畑が広がっていた様子がわかります。

表 愛知県下の桑園と棉作付面積の推移

単位（町）

	桑園	棉作
明治17年	—	8,853
明治20年	—	9,082
明治22年	3,350	—
明治25年	5,300	4,699
明治30年	7,860	1,743
明治35年	9,440	304
明治40年	15,160	86
明治43年	18,710	5
明治44年	19,820	1

『愛知県蚕糸業史』より
棉の作付面積は、品質の良い安価な外国棉との競合や、養蚕業の隆盛により激減しました。

愛知県の収繭量は、明治44年には長野県についで全国第2位となり、昭和初期にかけてピークを迎えました。昭和４年（1929）には約24,299トン（尾張で約9,997トン、三河で約14,383トン）でした。同年に世界恐慌が起きると、生糸の輸出が停止し、翌年の繭価は前年の半値以下となりました。養蚕に代わる産業が求められ、挙母（ころも）町（豊田市）では、新たな産業を模索するなか自動車産業の誘致を行いました。このことは現在の豊田市が発展していく転換点となりました。

豊田市域においては、戦後も製糸工場の加茂蚕糸（かもさんし）が中心となり、養蚕戸数が減少するなか養蚕業の合理化、大規模化がはかられましたが、昭和56年に同工場が廃業すると、平成期に養蚕農家はなくなりました。しかし、稲武地区では毎年伊勢神宮へ御料糸（生糸）を奉納するなど、今も養蚕の伝統継承に取り組んでいます。また、大正期建築の旧愛知県蚕業取締所第九支所の建物は、豊田市近代の産業とくらし発見館として、市域が養蚕製糸業で栄えた歴史を伝えています。

小西恭子（豊田市近代の産業とくらし発見館）

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee

矢作川流域のガラ紡の発達

愛知県内のガラ紡工場（2016.12.21筆者撮影）

臥雲辰致「綿紡機」（「明治十年内国勧業博覧会出品解説」より）

かつて綿作地帯であった三河湾沿岸地域では古くから織物業が盛んで、知多木綿や三河木綿は庶民の衣料として広く使われていました。当時の綿糸づくりは糸車などを用いた手紡ぎであり、夜なべ仕事は日常的でもありました。明治になり洋式紡績が勃興し、官営の第一紡績所となる愛知紡績所が、やはり当時の綿作地帯であった三河の岡崎に開業しています。

一方で、日本独自の紡績機械であるガラ紡機が信州の臥雲辰致（がうんときむね）によって開発され、1877年の第一回内国勧業博覧会で最高賞を得て脚光を浴びることになります。出品されたガラ紡機は手回し式の40錘（すい）で、一度に40本の糸を紡ぐことができる画期的な機械でした。これがいち早く岡崎に導入されますが、その際にこの地域を流れる矢作川の支流を利用した水車動力に変えたことによって、ガラ紡産業が大きく発展する始まりとなりました。

ガラ紡機の特徴は、ブリキ製の丸筒に綿を詰め、これを回転させることによって糸を紡ぐ洋式紡績とは逆の発想によって作られていることと、洋式紡績のような前工程の多くを省くことができる簡易な紡績機械というところにあります。しかも錘数を増やすことも容易で1台あたり長さ8間（けん）（512錘）とか9間（576錘）に増設され、生産量アップに貢献しました。

こうしたこともあってガラ紡産業は、現在の豊田市、岡崎市、西尾市にかけての矢作川流域一帯で一大地場産業として発展していきます。生産量のピークは戦後の衣料不足の時代で、電力の普及もあって街中にも進出した工場を含め、矢作川流域には1000を超えるガラ紡工場が建ち並んでいました。

1970年代になるとガラ紡産業は大きく後退しますが、愛知県内には今も数工場が操業しています。産業としては小さくなりましたが、しかし一方で、ガラ紡糸の特徴である太糸と風合いのある柔らかさが見直され、これを活かしたタオルやストール、赤ちゃん用品などの製品が静かなブームともなっています。

天野武弘（愛知大学中部地方産業研究所）

三河木綿について

三河木綿について（鹿島村 木綿田三割引高帳 寛文11年）

近世の三河では、主に西三河地域で木綿栽培が盛んでした。東三河地域西部に位置する蒲郡における綿作の最も古い記録は、寛文7年（1667）の平地村と一色村の「木綿田三割引帳」です。鹿島村にも寛文11年の「木綿田三割引高帳」があります。木綿田とは、検地では田とされていた土地での木綿栽培のことで、この時期、各村の水田で綿作が行われていたことがわかります。この3村における1戸当たりの平均面積は約6.6畝、一筆あたりの最小面積は6歩、最大面積は2反です。

江戸時代末期、文久4年（1864）の西郡（にしのこおり）組の「小買株鑑札」には、帳元（会計責任者）2名・行司（世話役）12名の名前が連ねられています。彼らの所在地は、西郡（現在の蒲郡市の中心部）・三谷・水竹・江畑・形原・荒木・西浦（ここまで現蒲郡市）・深溝・六栗（ここまで現幸田町）・幡豆（現幡豆町）と、いずれも旗本領です。蒲郡市域であっても、当時吉田藩領であった大塚などの地名はみえません。藩による保護や統制が及ばないため、組合をつくって過当競争を防ぎ、安定した商業活動の維持を図ったのでしょう。

当時の蒲郡における木綿の取引高や流通経路については、詳しい史料がないため詳細は明らかではありません。「小買株鑑札」に行司のひとりとしてその名前がみえる三谷村の弥太郎家の木綿取引史料によれば、同家は平野屋・木綿屋と呼ばれた木綿仲買商で、その取引先として土呂（岡崎市福岡町）の加藤家、萩原（幡豆郡吉良町）の糟谷家など、西三河の有力な木綿買継問屋の名前が記されています。

このことから、蒲郡地域の農家の女性たちによって織られた木綿は、「棒手振り買い」と呼ばれた地元小買人たちによって数反単位で買い集められ、鑑札に調印した仲買商たちの手を経て取引先の西三河の木綿買継問屋に売り渡され、港から船積みされて、全国へ流通したものと考えられます。

小田美紀（蒲郡市博物館）

©2022 Aichi Triennale Organizing Committee